

# 今後における日本酪農の展開方向

## 酪農全国基礎調査の結果から

東北大学 農学部

篠原 久

### 1 はじめに

ここにきて日本農業が輸入自由化の荒波に曝され、いかに太刀打ちしていくかという時に、そのモデルケースとして酪農が登場してくることにな

まず最初に、ここで紹介する調査の概要について触れておくことにする。酪農生産基盤強化促進対策事業の一環として、その中央協議会と中央酪農会議は平成3年度と4年度の両年に全国の酪農家に悉皆調査を実施し、8割以上の回収率を得た。この種の調査のなかでは抜群の成績であり、他作目、他畜種では考えられない結果である。このことは、日本酪農が明治以降の100年そこそこの歴史しか経ていないにもかかわらず、酪農振興の施策と相まって組織的にも整備され、酪農家段階でも記録がよくとられていることがアンケート調査でも高い回収を上げることができたゆえんとなっている。また、曲がりなりに土地に立脚して、頭数規模や個体能力の点ではヨーロッパの酪農と対等かそれを追い越すまでに成長した、いわば農業、農政の優等生的存在とみなされることにもつながっている。

表1 新政策での経営展望

	酪 農		乳 用 種 肥 育	肉 専 用 種 肥 育	肉 用 牛 繁 殖	
	北海道	都 府 県				
経営規模(頭)	経産牛80 (総飼養頭数 114) 飼料作物 作付実面積 72.5ha	経産牛40 (総飼養頭数 61) 飼料作物 作付実面積 10.6ha	肥育牛200	肥育牛100	繁殖成雌牛20 (総飼養頭数 40) 水稲 6.0ha 飼料作物 作付実面積 4.8ha	
生 産 性	単位当たり 生産量等	8,000 kg/頭	7,200 kg/頭	肥育終了月齢 18か月	肥育終了月齢 24か月	分娩間隔 12.5か月
	労働時間 (時間/頭)	63.0 (57)	87.2 (61)	14.6 (49)	33.4 (44)	41.1 (33)
	費用合計	50 円/生乳1kg (74)	70 円/生乳1kg (79)	29千円 /生体100kg (82)	35千円 /生体100kg (69)	235 千円/頭 (59)
	労働時間(時間)	6,100	4,700	3,600	3,100	3,400
	主たる 従事者	2,000	2,000	2,000	2,000	2,000
	補助的 従事者	1,700×2人	1,100×2人	800×2人	600×2人	700×2人
	雇 用	800	600	-	-	-

注) 1 ( )内は、平成3年生産費調査の平均を100とした数値である。  
2 乳用種肥育、肉専用種肥育の費用合計は、もと牛費を除外した数値である。  
3 労働時間はラウンドの関係で計と内訳が一致しない場合がある。

牧草と園芸・平成7年(1995年)1月号

目次

第43巻第1号(通巻503号)



夜明けの牧舎と雪原  
(北海道長沼町)

□ごあいさつ	森山 昭	表②
■今後における日本酪農の展開方法	篠原 久	1
■中山間傾斜放牧草地の特徴と維持管理	林 治雄	6
■有機農業が拓く道	星 寛治	11
□〈ルポルタージュ〉天皇杯を受賞した卯原内酪農生産組合		15
□花いっぱいのもちづくり	西川 勝己	19
□〈雪印種苗育成品種〉雪印の牧草優良品種群		表③
□雪印のエダマメ・シリーズ		表④

った。それが1 昨年9月の、いわゆる新政策の酪農版ともいえる「稲作以外の主要経営部門についての経営の展望と政策展開の基本方向」とそれに基づく経営展望である。具体的な目標数値は表1のような試算が示されている。つまり、経営規模は北海道で経産牛80頭、都府県で40頭、飼料作物の実面積は72.5haと10.6haと主たる従事者の労働時間が2,000時間というものである。しかし、この数値は、酪農の場合、実現不可能なものではないにしても、まだ現実との間に少なからずのギャップが生じ、その実現には多くの課題が残されている。そこで、目標を達成するために何が必要か、酪農家は何を求めているのかを酪農全国基礎調査から見てみたい。

## 2 飼養頭数規模および土地面積は

表2には、経営主年齢別の平均経産牛飼養頭数を示したが、北海道、都府県ともに新政策の目標値からすると約半分の規模というのが現状である。経営主の年齢が若いほど規模が大きくなっている。一方、平均耕地面積を表3でみたが、北海道、都府県ともに頭数規模が大きくなるほど耕地面積も大きくなるものの、経産牛1頭当たりの経営耕地面積でみると、頭数規模が大きくなるほど面積は小さくなり、必ずしも頭数規模の拡大に見合って土地の確保が進んで

表2 経営主年齢別の平均経産牛飼養頭数(頭)

	全 体	北海道	都府県
全 体	26.3	42.1	21.8
10・20代	34.5	42.6	28.5
30 代	32.6	44.1	26.0
40 代	30.5	44.1	26.0
50 代	25.1	41.8	21.2
60 代	16.8	28.4	15.6
70歳以上	13.7	19.3	13.2
無 回 答	32.3	49.1	20.9

表3 経産牛飼養頭数別の1頭当たり経営耕地面積

	平均経営耕地面積 (ha)			平均経産牛飼養頭数 (頭)			経産牛1頭当たり経営耕地面積 (a)		
	全 体	北海道	都府県	全 体	北海道	都府県	全 体	北海道	都府県
全 体	12.6	40.3	4.7	26.5	42.2	21.9	47.5	95.5	21.5
1-4頭	2.5	7.9	2.4	3.1	3.1	3.1	80.6	254.8	77.4
5-9頭	4.0	15.8	3.5	6.9	7.2	6.9	58.0	219.4	50.7
10-19頭	5.6	20.4	4.3	14.1	14.5	14.0	39.7	140.7	30.7
20-29頭	8.1	28.0	4.8	24.0	24.6	23.9	33.8	113.8	20.1
30-39頭	14.0	34.1	5.7	33.6	34.3	33.3	41.7	99.4	17.1
40-49頭	24.4	43.2	6.6	43.2	43.7	42.8	56.5	98.9	15.4
50-74頭	35.5	52.7	6.8	57.3	57.8	56.4	62.0	91.2	12.1
75-99頭	44.0	64.5	8.5	82.6	82.2	83.2	53.3	78.5	10.2
100頭以上	46.2	74.6	17.1	139.1	138.6	139.6	33.2	53.8	12.2

注)：本表は、経営耕地面積と経産牛飼養頭数の両方に回答があった経営のみの集計である(以下同じ)。

はいないことが分かる。

今後は、近在の農地を借地して、有効に活用することで飼料作付け面積の拡大を図っていくべきであろう。

## 3 生産性は

経産牛1頭当たり乳量と生乳出荷実績の関係

表4 平成2年度経産牛1頭当たり乳量別生乳出荷実績(平成3年度調査)(%)

□ 都府県の5%以上の範囲  
 ■ 北海道の5%以上の範囲

	酪農家戸数	5t未満	10t未満	20t未満	30t未満	40t未満	50t未満	75t未満	100t未満	125t未満	150t未満	175t未満	200t未満	250t未満	300t未満	350t未満	400t未満	450t未満	500t未満	500t以上	無回答	平均t
全 体	41,091	0.1	0.6	3.3	4.6	4.9	4.5	10.3	8.0	8.4	6.8	7.0	5.8	11.5	8.1	5.7	3.6	2.0	1.0	1.7	2.1	166.6
5.0t未満	7,135	0.1	1.2	6.9	9.4	9.2	8.0	16.4	10.7	9.4	6.0	5.4	3.5	5.1	2.9	1.6	0.9	0.4	0.4	0.6	2.0	100.0
5.5t未満	5,403	0.1	0.8	3.1	5.0	5.7	5.3	12.8	11.0	11.0	8.9	8.0	5.6	8.4	5.3	3.3	1.6	1.1	0.4	0.8	1.9	134.2
6.0t未満	5,247	0.0	0.3	1.2	2.4	4.0	4.0	10.2	8.6	10.3	8.2	9.2	7.2	13.3	7.8	5.0	2.8	1.5	0.9	1.4	1.6	168.5
6.5t未満	6,341	0.0	0.4	1.7	3.0	3.3	3.1	7.9	7.3	8.4	6.9	7.8	7.6	15.2	9.4	7.0	4.1	2.4	1.1	1.8	1.7	186.6
7.0t未満	4,776	0.0	0.1	1.1	2.0	1.9	1.8	5.8	5.6	7.1	6.9	7.9	7.3	16.3	12.5	8.8	5.9	3.3	1.4	3.0	1.3	218.1
7.5t未満	3,486	0.1	0.3	1.1	1.9	2.6	2.5	6.5	5.2	5.7	6.1	6.8	6.3	15.2	12.7	9.6	7.6	3.6	1.9	3.0	1.5	221.8
8.0t未満	2,080	0.0	0.1	1.5	2.1	2.2	1.9	5.0	4.2	5.0	6.4	6.2	6.5	15.8	13.9	11.2	7.1	4.1	2.4	3.6	1.1	234.2
8.5t未満	1,191	0.2	0.2	2.6	3.8	2.9	3.4	6.4	5.6	5.5	4.5	5.4	6.0	13.7	12.3	10.2	6.5	4.0	1.7	3.9	1.3	218.9
9.0t未満	438	0.0	0.7	1.6	3.7	3.9	3.4	9.4	5.7	4.8	4.1	5.3	4.8	12.3	13.9	11.0	6.8	3.0	1.8	2.5	1.4	213.6
9.0t以上	645	0.5	3.4	9.0	8.2	6.5	5.7	11.9	6.0	6.4	5.1	4.3	2.9	8.4	7.3	3.9	3.6	2.3	1.2	1.4	1.9	136.8
無 回 答	1,993	0.3	1.4	7.5	10.3	8.6	7.4	14.0	8.8	6.3	4.8	3.8	3.3	6.4	3.5	2.5	1.9	1.0	0.6	0.8	6.8	111.2

(表4)をみると、出荷乳量が多いことと個体の能力との間にはあまり関係がなく、少なくとも出荷乳量が多いからといって個体能力が低くなるということはないようである。つまり、乳量レベルが異なっても出荷乳量の範囲は、北海道では200～450t(グリーンの枠)、都府県では50～300t(ピンクの枠)に多くの経営が認められることから分かる。逆に、どちらかという表の左上層および右下層に北海道、都府県ともに5%以上層があることからすると、出荷乳量の多い経営でも能力の高い牛群を管理していけることが考えられる。

ちなみに、今回の調査の集計で1頭当たり乳量は北海道で6,359kg、都府県が6,110kgとなっている。

#### 4 労働時間は

経営主の年齢と酪農労働時間の関係を見たのが表5である。2,000時間の労働時間を達成するためには、1日当たりの通常期労働時間を短縮するとともに繁忙期の時間についても減少せねばならない。とりわけ北海道では、年間労働時間で3,000時間を超えており、その原因が繁忙期日数の長さで1日当たりの労働時間にあることからすると、飼料生産にかかわる作業の短縮が望まれる。労働時間を短縮するために飼料生産を中止することのないようにしたいものである。

そこで表6には、労働の軽減対策として酪農家は何を考えているかを見た。北海道では飼養管理の改善、ヘルパーの活用、搾乳および飼養管理の省力投資および粗飼料調製の改善が多く、都府県では粗飼料の購入、飼料作の省力化投資が高くなっている。このように、都府県では明らかに土地

表5 経営主の年齢と酪農労働時間 (時間、日)

	通常期	繁忙期		推定年間労働時間
	1日当たり労働時間	1日当たり労働時間	日数	
全体	6.4	10.9	63.8	2,592.0
10・20代	6.9	11.9	74.9	2,869.5
30代	6.9	11.8	72.5	2,841.4
40代	6.7	11.4	66.5	2,731.0
50代	6.3	10.7	63.3	2,532.5
60代	5.8	9.8	53.3	2,261.9
70歳以上	5.6	9.0	48.3	2,103.9
北海道	7.5	12.4	85.1	3,132.5
10・20代	7.5	12.8	85.8	3,182.9
30代	7.6	12.8	85.1	3,172.3
40代	7.6	12.6	84.2	3,176.9
50代	7.4	12.1	87.5	3,092.8
60代	7.1	11.3	82.6	2,920.3
70歳以上	6.8	10.5	71.4	2,758.9
都府県	6.1	10.5	57.8	2,441.5
10・20代	6.5	11.2	66.8	2,638.3
30代	6.5	11.2	65.2	2,654.1
40代	6.4	11.0	60.7	2,590.9
50代	6.0	10.4	57.7	2,406.1
60代	5.7	9.6	50.4	2,196.9
70歳以上	5.5	8.9	46.5	2,052.3

注) 推定年間労働時間は以下の式で計算した。  
 $(365日 - 繁忙期日数) \times 通常期1日当たり労働時間 + 繁忙期日数 \times 繁忙期1日当たり労働時間$

からの遊離への動きがでていとみざるをえない。さらに、搾乳および飼養管理の省力化の切り札としてフリーストール、ミルクパーラーの導入が考えられるが、労働時間との関係を見たのが表7である。表を見る限りでは、フリーストール、ミルクパーラーの導入が必ずしも労働時間の軽減につながってはいないことが見てとれる。

表6 労働軽減対策

(上段：戸数、下段：%)

	酪農家戸数	雇用労働力の活用	ヘルパーの活用	飼養管理の改善	哺育・育成の委託	飼養管理の共同化	搾乳飼養管理の省力投資	粗飼料調製の改善	粗飼料生産の委託	粗飼料の購入	飼料作の省力化投資	飼養頭数を減らす	その他	軽減の必要なし	無回答
全体	41,091	4,555	12,977	16,253	3,100	738	8,440	8,932	2,457	10,209	5,787	7,712	996	5,538	1,097
	100.0	11.1	31.6	39.6	7.5	1.8	20.5	21.7	6.0	24.8	14.1	18.8	2.4	13.5	2.7
北海道	9,189	1,862	3,169	4,603	809	254	3,013	2,728	1,095	629	1,230	1,277	210	691	285
	100.0	20.3	34.5	50.1	8.8	2.8	32.8	29.7	11.9	6.8	13.4	13.9	2.3	7.5	3.1
都府県	31,902	2,693	9,808	11,650	2,291	484	5,427	6,204	1,362	9,580	4,557	6,435	786	4,847	812
	100.0	8.4	30.7	36.5	7.2	1.5	17.0	19.4	4.3	30.0	14.3	20.2	2.5	15.2	2.5

表7 経営主の年間労働時間別フリーストール、ミルクパラー導入状況

	酪農家戸数	フリーストール				ミルクパラー			
		導入	導入検討	検討していない	無回答	導入	導入検討	検討していない	無回答
全体	41,091	2.8	11.0	81.8	4.4	3.2	9.6	81.7	5.4
北海道	9,189	4.7	23.0	67.6	4.6	3.8	19.3	70.8	6.1
1,800時間未満	372	3.0	9.1	82.5	5.4	2.7	7.0	85.2	5.1
2,000時間未満	234	1.7	16.7	77.8	3.8	1.7	14.5	79.5	4.3
2,400時間未満	784	3.4	17.2	75.5	3.8	3.2	14.0	77.6	5.2
3,000時間未満	1,749	4.9	23.5	67.6	3.9	3.8	19.7	71.3	5.1
4,000時間未満	3,664	4.9	25.4	66.6	3.1	3.7	21.8	69.9	4.6
4,000時間以上	1,059	5.9	28.6	61.9	3.6	4.8	24.0	65.7	5.5
無回答	1,327	4.6	20.0	64.5	10.9	4.2	15.3	67.3	13.2
都府県	31,902	2.2	7.5	85.9	4.3	3.0	6.9	84.9	5.3
1,800時間未満	6,720	0.9	2.5	92.5	4.1	1.8	1.9	91.5	4.7
2,000時間未満	2,315	1.0	3.8	91.7	3.5	1.9	3.4	90.6	4.1
2,400時間未満	4,691	2.1	6.7	87.9	3.4	2.7	5.8	87.2	4.3
3,000時間未満	6,138	2.5	9.2	85.4	2.9	3.0	8.5	84.8	3.7
4,000時間未満	7,128	3.2	11.6	82.3	3.0	3.7	10.8	81.7	3.9
4,000時間以上	1,227	3.7	15.0	78.4	2.9	4.4	14.3	78.2	3.1
無回答	3,683	2.9	7.1	78.0	12.0	4.4	6.8	74.8	14.0

## 5 支援組織と情報支援は

このような経営目標を達成する上で、課題が山積している状況で、酪農家を支える支援組織はどうあるべきかという点について見てみよう。経産牛1頭当たりの乳量別にみた酪農技術の相談先(表8)は農協、獣医師・家畜人工授精師、酪農関係業者および酪農家への相談割合が多く、農業改良普及所(センター)がこれに次ぐ。特に北海道では、農業改良普及センターの相談割合が高いのが特徴である。経産牛能力レベル別にみた相談先としては、北海道では、農協が6,000kg未満層を、獣医師・家畜人工授精師は7,000~8,000kg層を、酪

表8 経産牛1頭当たり乳量別の酪農技術相談先

	酪農家戸数	農協	畜産会	市町村	普及所	家保	試験場	教育機関	獣医師・授精師	酪農関係業者	酪農家	その他	相談先はない	必要がない	無回答
全体	41,091	50.6	2.5	2.1	21.5	6.2	2.1	0.4	61.3	29.1	44.3	2.1	2.9	2.7	1.6
北海道	9,189	64.8	1.0	0.9	44.0	0.4	0.4	0.7	57.1	26.4	39.1	1.9	3.3	2.5	2.4
5.0t未満	1,164	68.4	1.5	1.4	38.8	0.7	0.3	1.3	54.0	21.0	35.2	1.7	3.4	3.9	3.3
5.5t未満	1,025	69.7	1.2	0.6	43.0	0.2	0.6	0.4	56.0	23.0	36.7	1.5	3.0	2.0	2.6
6.0t未満	1,227	68.3	0.7	0.7	45.6	0.2	0.2	0.6	56.7	23.5	41.7	1.5	3.7	2.3	1.3
6.5t未満	1,527	64.2	0.9	0.8	44.9	0.5	0.3	0.8	58.7	28.1	40.9	1.6	3.3	2.2	2.1
7.0t未満	1,223	63.2	1.0	0.8	45.9	0.3	0.2	0.3	58.9	29.7	39.7	2.2	3.2	2.2	2.0
7.5t未満	902	60.8	1.1	0.6	45.8	—	0.7	1.0	60.8	30.7	44.6	2.0	2.9	1.8	2.0
8.0t未満	561	53.8	0.7	0.5	48.7	0.2	0.2	1.4	60.8	34.6	40.5	3.2	2.5	2.1	2.0
8.5t未満	272	57.4	1.5	0.4	47.4	0.7	1.5	0.7	59.2	34.9	41.9	2.2	2.6	1.5	2.9
9.0t未満	109	54.1	—	—	46.8	0.9	—	1.8	59.6	30.3	35.8	2.8	3.7	1.8	2.8
9.0t以上	99	58.6	2.0	—	40.4	—	—	—	51.5	27.3	34.3	3.0	6.1	7.1	4.0
無回答	482	68.5	0.6	2.3	42.1	1.0	0.4	0.4	56.2	20.5	29.9	1.5	3.1	2.9	5.2
都府県	31,902	46.6	2.9	2.5	15.0	7.9	2.6	0.4	62.5	29.9	45.8	2.1	2.8	2.8	1.3
5.0t未満	5,971	46.5	2.9	2.7	12.4	7.8	1.6	0.3	60.5	25.7	43.9	1.7	3.7	3.7	1.2
5.5t未満	4,378	47.5	3.1	2.2	14.2	7.4	1.7	0.4	63.3	27.6	45.3	2.2	3.4	3.0	1.1
6.0t未満	4,020	47.2	2.7	2.6	15.4	7.3	2.8	0.3	63.9	31.2	48.5	2.1	1.9	2.4	1.1
6.5t未満	4,814	46.0	2.9	2.8	16.6	7.2	2.8	0.3	63.9	32.1	46.8	2.3	2.4	2.3	1.4
7.0t未満	3,553	45.6	2.6	2.5	17.9	7.7	3.2	0.6	65.3	33.6	47.7	2.5	1.9	2.1	1.4
7.5t未満	2,584	46.2	3.2	1.8	17.2	7.1	3.4	0.5	62.7	34.1	48.0	2.5	2.6	2.4	1.0
8.0t未満	1,519	45.5	3.1	2.3	17.6	9.1	4.7	0.2	63.7	34.8	46.8	2.7	2.4	2.8	1.2
8.5t未満	919	46.5	2.7	1.6	16.0	8.2	3.3	0.3	62.5	37.3	44.1	2.6	2.3	3.2	1.0
9.0t未満	329	47.1	2.4	1.8	14.6	7.3	6.1	0.3	66.0	32.8	43.5	3.0	1.5	2.1	0.9
9.0t以上	546	45.1	4.4	2.7	14.5	10.8	2.4	—	53.8	27.3	40.7	2.4	4.2	4.4	2.0
無回答	1,511	46.0	3.0	2.8	9.3	9.8	1.7	0.1	57.8	22.6	38.3	1.4	3.8	3.4	3.7

注)平成3年度と4年度調査のクロス集計のため未調査分は除いた。

表9 経産牛1頭当たり乳量別の情報提供希望分野（複数回答）

	酪農家戸数	経営診断	税務	投資・資金	施設設計	生産資材	飼料設計	乳質改善	牛群改良	土壌分析	飼料分析	飼料生産 調製技術	ふん尿処理	その他	無回答
全体	41,091	36.2	17.3	15.5	4.8	13.8	29.2	32.5	16.6	8.2	14.1	13.2	19.2	3.8	5.0
北海道	9,189	40.2	20.5	26.5	9.4	24.3	24.9	23.9	12.5	12.3	14.6	17.7	7.4	3.3	6.5
5.0t未満	1,164	37.3	16.2	25.5	9.1	24.0	19.6	27.1	10.9	11.9	14.2	14.3	6.9	4.7	8.2
5.5t未満	1,025	41.7	18.0	25.6	9.0	25.9	23.7	28.1	12.2	13.6	14.2	18.6	5.5	2.7	6.0
6.0t未満	1,227	40.7	20.1	27.5	9.9	25.5	24.4	25.5	12.8	10.8	14.6	18.1	7.3	3.0	5.2
6.5t未満	1,527	41.1	22.5	26.8	9.3	23.2	25.1	25.2	10.8	13.8	15.5	17.4	7.6	2.6	5.7
7.0t未満	1,223	39.8	22.6	26.7	9.5	26.2	28.2	22.1	11.7	11.0	13.3	19.4	9.8	3.2	5.9
7.5t未満	902	41.0	23.1	29.3	11.2	24.6	29.2	19.0	13.0	11.9	14.2	20.8	7.5	2.8	5.5
8.0t未満	561	39.0	24.1	28.2	7.8	25.3	31.0	18.9	18.4	12.3	13.9	18.2	8.6	3.4	4.8
8.5t未満	272	40.1	22.8	31.6	12.1	25.4	26.5	12.1	12.5	12.1	16.9	20.6	9.9	2.9	5.1
9.0t未満	109	42.2	21.1	23.9	11.0	23.9	27.5	16.5	25.7	15.6	18.3	18.3	4.6	4.6	7.3
9.0t以上	99	32.3	20.2	24.2	10.1	18.2	29.3	17.2	9.1	13.1	14.1	13.1	4.0	4.0	15.2
無回答	482	39.4	18.7	20.3	7.7	23.0	21.0	30.9	12.4	13.1	13.7	14.5	4.8	3.3	10.8
都府県	31,902	35.0	16.4	12.3	3.4	10.8	30.5	35.0	17.7	7.1	14.0	11.9	22.7	4.0	4.6
5.0t未満	5,971	32.7	13.9	9.9	3.1	10.1	28.8	42.8	15.6	7.0	12.3	13.3	17.6	4.8	4.7
5.5t未満	4,378	34.1	14.4	10.6	3.6	10.8	31.0	39.7	15.6	7.4	14.0	12.4	20.7	3.7	4.8
6.0t未満	4,020	36.1	18.0	13.2	3.0	10.0	30.2	35.7	18.5	7.6	14.1	12.1	23.2	3.9	3.2
6.5t未満	4,814	35.4	17.5	13.5	3.9	11.3	30.5	33.8	18.7	7.3	13.8	12.3	25.0	3.7	3.9
7.0t未満	3,553	37.5	18.3	14.3	4.1	11.6	32.9	29.9	19.4	6.2	13.8	10.9	27.3	3.0	4.3
7.5t未満	2,584	37.5	19.4	14.3	3.9	10.2	32.5	27.4	20.8	7.0	15.6	11.3	26.7	3.7	3.7
8.0t未満	1,519	36.7	19.3	13.3	3.2	11.5	30.4	27.7	21.3	7.7	17.0	10.8	28.8	3.2	3.4
8.5t未満	919	37.2	19.6	13.9	4.0	12.6	30.6	27.2	20.0	6.1	14.9	10.7	27.4	3.4	3.8
9.0t未満	329	34.3	17.6	17.3	4.0	12.2	30.7	26.7	21.0	6.4	17.3	11.2	27.7	3.6	2.4
9.0t以上	546	31.3	15.8	10.6	2.9	12.6	28.0	31.7	14.7	5.9	13.6	10.3	20.1	6.4	6.2
無回答	1,511	28.2	12.6	7.6	2.1	9.3	25.5	37.5	13.4	6.1	11.9	9.9	17.1	5.1	12.8

注) 平成3年度と4年度調査のクロス集計のため未調査分は除いた。

農関係業者と農業改良普及センターは7,500～9,000 kg層を中心に相談割合が高い。都府県では、獣医・家畜人工授精師への相談割合は各層で高く、農業改良普及センターが6,500～8,000 kg層で、酪農関係業者は6,000～8,500 kg層にモードがある。基本的に酪農家は課題ごとに相談先を選択しているわけであるが、9,000 kg以上層で「相談先がない」、あるいは「必要がない」という割合が増えているのは関係団体が十分対応できていないことを示すものとして注目される。

次に、情報提供希望分野(表9)を見ると、牛群能力で希望分野が異なるのは乳質改善で、5,500 kg未満層で希望が高く、逆に能力の高い層では低くなっている。経営診断への希望は牛群能力水準には直接関係なく、各層で希望が高いが、税務に関しては6,000～8,500 kg層で、投資計画・資金調達に関しては北海道(7,000～8,500 kg)と都府県(8,500～9,000 kg)で希望割合の高い層が異なる。

また、牛群改良に関しては9,000 kg未満までは、乳量レベルが高いほど関心が高いといった結果となっている。飼料設計は総じて希望が高く、糞尿処理に関する情報提供希望は都府県で関心が高く、問題が深刻になっているのが分かる。

## 6 おわりに

以上、新政策の展望目標との対比で全国酪農基礎調査の結果を見たが、新政策の目標値は当然、実際値よりも高く設定されるわけであるが、実現不可能、あるいは相互に矛盾する目標値は混乱を招くことになりかねない。とかく目標値のみが一人歩きし話題となるが、個別の経営にとっての目標は必ずしも一様ではなく、むしろ千差万別であろう。酪農環境の厳しい時期だからこそ、自分の経営のスタイルや目標を見失わずに経営を展開されることに期待したい。